八木書店 近代文学特別講座

活字をはみだすもの 第26回

編集者・島崎藤村 ―「藤村童話叢書」の出版資料から見る

講師 大木志門 先生

◇開催 11月22日（土） 13:00～14:00

最初の長篇小説『破戒』（明治39年）を自ら興した「緑蔭叢書」の第1編として世に送り出したことで知られる島崎藤村は、雑誌や叢書など生涯にわたり数々の出版活動に関わり続けた作家でした。晩年の「藤村童話叢書」（昭和15―16年、研究社）はその最後の事業であり、この時の出版資料には藤村の様々な苦心の跡が残されています。そのような「編集者」藤村の姿を資料から明らかにしてゆきたいと思います。

【講師紹介】 東海大学教授、1974年生。自然主義文学・私小説を中心に研究。主な著書・編著に『徳田秋聲と「文学」』（鼎書房、2021）、『島崎藤村短篇集』（岩波文庫、2022）、『高村光太郎作品アンソロジー 戦争への道、戦争からの道』（田畑書店、2025）など。

耽美とミステリーの懸け橋 ―翻訳家・谷崎潤一郎の苦心

講師 河野龍也 先生

◇開催 11月22日（土） 15:00～16:00

「阿片溺愛者の告白」に代表されるトマス・ド・クインシーの著作は、オスカー・ワイルドと並んで、谷崎潤一郎・佐藤春夫ら大正期の耽美派文学に対する偉大な教科書の役割を果たしました。昭和初期のエロ・グロ・ナンセンスの時代にも脚光を浴び、谷崎は「芸術の一種として見たる殺人に就いて」（『犯罪科学』昭和6年3月～6月未完）を自ら翻訳しています。耽美とミステリーを架橋した名訳の舞台裏の苦心を、自筆の訳稿から探ります。

【講師紹介】 東京大学准教授、1976年生。佐藤春夫を中心に、美術と文学ジャンルの交流や作家の異文化理解に関心がある。著書に『佐藤春夫と大正日本の感性』（鼎書房、2019）、編著に『知られざる佐藤春夫の軌跡』（武蔵野書院、2022）、『佐藤春夫読本』（勉誠出版、2015）など。

作家と編集者 ―谷崎潤一郎・川端康成の書簡を通して

講師 中澤 弥 先生

◇開催 11月29日（土） 13:00～14:00

作家と編集者の関係は、作品の成り立ちにとって、時に芸術的に大きな役割を果たすことは知られている。その一方で、原稿料や営業上の思惑などの要因をめぐって作者と出版社の世俗的なせめぎ合いが行われる場でもある。今回は、谷崎潤一郎・川端康成と改造社の編集者の間で交わされた書簡を取り上げ、原稿料や題名のアピール度、後輩作家の原稿売り込みなど、どちらかといえば世俗的現場を垣間見ていきたい。

【講師紹介】 多摩大学客員教授、1959年生。文学と美術・映画などとの交流を主な研究テーマとする。また、横光利一など租界都市上海における日本人作家の活動にも興味を持つ。

芥川龍之介「滝田樗陰宛書簡」を読む ―作品本文の改稿を伝える手紙

講師 庄司達也 先生

◇開催 11月29日（土） 15:00～16:00

芥川龍之介は、作品の完成に並々ならぬ努力を傾けた作家として知られています。彼は、原稿を送った後であっても、間に合えばその訂正を厭わず求めました。本書簡はその一例として位置づけられるものです。編集者との遣り取りを通して、作品「秋」の創作の現場を覗いて見ましょう。

【講師紹介】 横浜市立大学教授、1961年生。芥川龍之介の〈人〉と〈文学〉を主たる研究テーマとし、出版メディアと作家、読者の関係にも関心を持つ。また、作家が聴いた音楽を蓄音機とSPレコードで再現するレコード・コンサートを企画・開催。著書に『100年読み継がれる名作 芥川龍之介短編集』（監修、世界文化社、2024）など。

※参加費無料 参加ご希望の方は左記 QR コード、または別紙申込書をご覧ください。 （2025.10.24）

八木書店 古書部 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-1-7 営業：10 時～18 時 定休：日祝
TEL 03-3291-8221 FAX 03-3291-8223 https://catalogue.books-yagi.co.jp/ mailto:kosyo@books-yagi.co.jp

2025.10.31 開設